

おさん

太宰治

青空文庫

たましいの、抜けたひとのように、足音も無く玄関から出て行きます。私はお勝手で夕食の後仕末あとしまつをしながら、ずっとその気配を背中に感じ、お皿を取落すほど淋さびしく、思わず溜息ためいきをついて、すこし伸びあがってお勝手の格子窓こうしまどから外を見ますと、かぼちやの蔓つるのうねりくねってからみついている生垣いけがきに沿った小路を夫が、洗いざらしの白浴衣しろゆかたに細い兵古帯へこおびをぐるぐる巻きにして、夏の夕闇に浮いてふわふわ、ほとんど幽霊のようなとてもこの世に生きているものではないような、情無い悲しいうしろ姿を見せて歩いて行きます。

「お父さまは？」

庭で遊んでいた七つの長女が、お勝手口のバケツで足を洗いながら、無心に私にたずねます。この子は、母よりも父のほうをよけいに慕したっていて、毎晩六畳に父と蒲団ふとんを並べ、一つ蚊帳かやに寝ているのです。

「お寺へ。」

口から出まかせに、いい加減の返事をして、そうして、言ってしまったから、何だかともんでも無い不吉な事を言ったような気がして、肌寒はださむくなりました。

「お寺へ？ 何しに？」

「お盆ぼんでしょう？ だから、お父さまが、お寺まいりに行ったの。」

嘘うそが不思議なくらい、すらすらと出ました。本当にその日は、お盆の十三日でした。よその女の子は、綺麗きれいな着物を着て、そのお家の門かど口ぐちに出て、お得意そうに長い袂たもとをひらひらさせて遊んでいるのに、うちの子供たちは、いい着物を戦争中に皆焼いてしまったので、お盆でも、ふだんの日と変わらず粗末な洋服を着ているのです。

「そう？ 早く帰って来るかしら。」

「さあ、どうでしょうね。マサ子がおとなしくしていたら、早くお帰りになるかも知れないわ。」

とは言ったが、しかし、あのご様子では、今夜も外泊にきまっています。

マサ子はお勝手にあがって、それから三畳間へ行き、三畳間の窓縁まじべりに淋しそうに腰かけて外を眺ながめ、

「お母さま、マサ子のお豆に花が咲いているわ。」

と呟くのを聞いて、いじらしさに、つい涙ぐみ、

「どれどれ、あら、ほんとう。いまに、お豆がたくさん生るわよ。」

玄関のわきに、十坪つぽくらいの畑地があつて、以前は私がそこへいろいろ野菜を植えていたのだけれども、子供が三人になつて、とても畑のほうにまで手がまわらず、また夫も、昔は私の畑仕事にときどき手伝つて下さったものなのに、ちか頃はてんで、うちの事にかまわず、お隣りの畑などは旦那さまがきれいに手入れなさつて、さまざまのお野菜がたくさん見事に出来ていて、うちの畑はそれに較くらべるとはかなく恥かしくただ雑草ばかり生えしげつて、マサ子が配給のお豆を一粒、土にうずめて水をかけ、それがひよいと芽を出して、おもちゃも何も持つていないマサ子にとつて、それが唯一のご自慢の財産で、お隣りへ遊びに行つても、うちのお豆、うちのお豆、とはにかまずに吹ふいちよう聴きしている様子なのです。

おちぶれ。わびしさ。いいえ、それはもう、いまの日本では、私たちに限つた事でなく、殊ことにこの東京に住んでいる人たちは、どちらを見ても、元気が無くおちぶれた感じで、ひどく大儀そうにのろのろと動き廻つていて、私たちも持物全部を焼いてしまつて、事毎ことごとに身のおちぶれを感じるけれども、しかし、いま苦しいのは、そんな事よりも、さらにさ

し迫った、この世のひとの妻として、何よりもつらい或る事^あなのです。

私の夫は、神田の、かなり有名な或る雑誌社に十年ちかく勤めていました。そうして八年前に私と、平凡な見合い結婚をして、もうその頃から既にそろそろ東京では貸家が少くなり、中央線に沿った郊外の、しかも畑の中の一軒家みたいな、この小さい貸家をやつと捜し当て、それから大戦争まで、ずっとここに住んでいたのです。

夫はからだが弱いので、召集からも徴用からものがれ、無事に毎日、雑誌社に通勤していたのですが、戦争がはげしくなつて、私たちの住んでいるこの郊外の町に、飛行機の製作工場などがあるおかげで、家のすぐ近くにもひんぴんと爆弾が降つて来て、とうとう或る夜、裏の竹藪^{たけやぶ}に一弾が落ちて、そのためにお勝手とお便所と三畳間が滅茶々々になり、とても親子四人（その頃はマサ子の他に、長男の義太郎も生れていました）その半壊^{そかい}の家に住みつづける事が出来なくなりましたので、私と二人の子供は、私の里の青森市へ疎開^{そかい}する事になり、夫はひとり半壊の家の六畳間に寝起きして、相変らず雑誌社に通勤し続ける事にしました。

けれども、私たちが青森市に疎開して、四箇月も経たぬうちに、かえって青森市が空襲を受けて全焼し、私たちがたいへんな苦勞をして青森市へ持ち運んだ荷物全部を焼失して

しまい、それこそ着のみのままのきりきりとした姿で、青森市の焼け残った知合いの家へ行って、地獄の夢を見ている思いでただまごついて、十日ほどやつぱりになっていくうちに、日本の無条件降伏という事になり、私は夫のいる東京が恋いしくて、二人の子供を連れ、ほとんど乞食こじきの姿でまたもや東京に舞い戻り、他に移り住む家も無いので、半壊の家を大工にたのんで大ざっぱな修理をしてもらって、どうやらまた以前のような、親子四人の水いらずの生活にかえり、少し、ほっとしたら、夫の身の上が変って来ました。

雑誌社は罹災りさいし、その上、社の重役の間に資本の事でごたごたが起つたとやらで、社は解散になり、夫はたちまち失業者という事になりましたが、しかし、永年雑誌社に勤めて、その方面で知合いのお方たちがたくさんございますので、そのうちの有力らしいお方たちと資本を出し合い、あたらしく出版社を起して、二、三種類の本を出版した様子でした。けれども、その出版の仕事も、紙の買入れ方をしくじったとかで、かなりの欠損になり、夫も多額の借金を背負い、その後仕末のために、ぼんやり毎日、家を出て、夕方くたびれ切つたような姿で帰宅し、以前から無口のお方でありましたが、その頃からいつそう、むつつり押し黙って、そうして出版の欠損の穴埋めが、どうやら出来て、それからもう何の仕事をする気力も失ってしまったようで、けれども、一日中うちにいらつしやるとい

わけでもなく、何か考え、縁側にのっさり立って、煙草を吸いながら、遠い地平線のほうをいつまでも見ていらして、ああ、またはじまった、と私がはらはらしていますと、はたして、思いあまつたような深い溜息をついて吸いかけの煙草を庭にぽんと捨て、机の引出しから財布さいふを取って懷にいれ、そうして、あの、たましいの抜けたひとみたいな、足音の無い歩き方で、そつと玄関から出て行つて、その晩はたいいお歸りになりません。

よい夫、やさしい夫でした。お酒は、日本酒なら一合、ビールなら一本やつとくらのところで、煙草は吸いますが、それも配給の煙草で間に合う程度で、結婚してもう十年ちかくなるのに、その間いちども私をぶったり、また口汚くののしたりなさった事はありませんでした。たつたいちど、夫のところへお客様がおいでになっていた時、いまのマサ子はが三つくらいの頃でしたかしら、お客様のところへ這はって行き、お客様のお茶をこぼしたとやらで、私を呼んだらしいのに、私はお勝手でばたばたしちりん七輪あおを煽いでいたので聞えず、返事をしなかったら、夫は、その時だけは、ものすごい顔をしてマサ子を抱いてお勝手へ来て、マサ子を板の間におろして、それから、殺氣立った眼つきで私をにらみ、しばらく棒立ちになっていらして、一ことも何もおつしやらず、やがてくると私に背を向け、お部屋のほうへ行き、ピシヤリ、と私の骨のずいまで響くような、実にするどい強い音

を立てて、お部屋の襖ふすまをしめましたので、私は男のおそろしさに震え上がりました。夫から怒られた記憶は、本当に、たったそれ一つだけで、このたびの戦争のために私もいろいろな並の苦労は致しましたけれども、それでも、夫の優やさしさを思えば、この八年間、私は仕合せ者であつたと言いたくなるのです。

（変つたお方になつてしまった。いったい、いつ頃から、あの事がはじまつたのだろう。疎開先の青森から引き上げて来て、四箇月振りぶで夫と逢あつた時、夫の笑顔がどこやら卑屈で、そうして、私の視線を避けるような、おどおどしたお態度で、私はただそれを、不自由なひとり暮しのために、おやつれになつた、とだけ感じて、いたいたしく思つたものだが、或あるいはあの四箇月の間に、ああ、もう何も考えまい、考えると、考えるだけ苦しみの泥沼に深く落ち込むばかりだ。）

どうせお帰りにならない夫の蒲団を、マサ子の蒲団と並べて敷いて、それから蚊帳かやを吊つりながら、私は悲しく、くるしゅうございました。

翌^{あく}る日のお昼すこし前に、私が玄関の傍^{そば}の井戸端^{いどばた}で、ことしの春に生れた次女のトシ子のおむつを洗濯していたら、夫がどろぼうのような日蔭者くさい顔つきをして、こそそそやって来て、私を見て、黙ってひよいと頭をさげて、つまずいて、つんのめりながら玄関にはいつて行きました。妻の私に、思わず頭をさげるなど、ああ、夫も、くるしいのだろう、と思ったたら、いじらしさに胸が一ぱいになり、とても洗濯をつづける事が出来なくて、立って私も夫の後を追って家へはいり、

「暑かったでしょう？ はだかになつたら？ けさ、お盆の特配で、ビールが二本配給になつたの。ひやして置きましたけど、お飲みになりますか？」

夫はおどおどして気弱く笑い、

「そいつは、凄^{すご}いね。」

と声さえかすれて、

「お母さんと一本ずつ飲みましようか。」

見え透いた、下手^{へた}なお世辞みたいな事まで言うのでした。

「お相手をしますわ。」

私の死んだ父が大酒家で、そのせいか私は、夫よりもお酒が強いくらいなのです。結婚

したばかりの頃、夫と二人で新宿を歩いて、おでんやなどにはいり、お酒を飲んでも、夫はすぐ真赤になってだめになりますが、私は一向になんとも無く、ただすこし、どういうわけか耳鳴りみたいなものを感じるだけでした。

三畳間で、子供たちは、ごはん、夫は、はだかで、そうして濡れ手拭いてぬぐを肩にかぶせて、ビール、私はコップ一ぱいだけ附合わせていただいて、あとはもったいないので遠慮して、次女のトシ子を抱いておっぱいをやり、うわべは平和な一家団だんらん欒の図でしたが、やはり気まずく、夫は私の視線を避けてばかりいますし、また私も、夫の痛いところにさわらないよう話題を細心に選択しなければならず、どうしても話がはずみません。長女のマサ子も、長男の義太郎も、何か両親のそんな気持のこだわりを敏感に察するものらしく、ひどくおとなしく代用食の蒸パンむしをズルチンの紅茶にひたしてたべています。

「昼の酒は、酔うねえ。」

「あら、ほんとう、からだじゆう、まつかですわ。」

その時ちらと、私は、見ました。夫の顎あごの下に、むらさき色の蛾がが一匹へばりついていて、いいえ、蛾ではありません、結婚したばかりの頃、私にも、その、覚えがあったので、蛾の形のあざをちらと見て、はつとして、と同時に夫も、私に気づかれたのを知ったらし

く、どぎまぎして、肩にかけている濡れ手拭いの端で、そのかまれた跡を不器用におおいかくし、はじめからその蛾の形をごまかすために濡れ手拭いなど肩にかけていたのだという事もわかりましたが、しかし、私はなんにも気附かぬふりを仕様と、ずいぶん努力して、「マサ子も、お父さまとご一緒だと、パンパがおいしいようね。」

と冗談めかして言ってみましたが、何だかそれも夫への皮肉みたいに響いて、かえってへんに白々しくなり、私の苦しさも極度に達して来た時、突然、お隣りのラジオがフランスの国歌をはじめまして、夫はそれに耳を傾け、

「ああ、そうか、きょうは巴里祭だ。」

とひとりごとのようにおつしやつて、幽かに笑い、それから、マサ子と私に半々に言い聞かせるように、

「七月十四日、この日はね、革命、……」

と言いかけて、ふつと言葉がとぎれて、見ると、夫は口をゆがめ、眼に涙が光って、泣きたいのをこらえている顔でした。それから、ほとんど涙声になって、

「バスチーユのね、牢獄を攻撃してね、民衆がね、あちらからもこちらからも立ち上って、それ以来、フランスの、春こうろうの花の宴が永遠に、永遠にだよ、永遠に失われる事に

なつただけだね、でも、破壊しなければいけなかったんだ、永遠に新秩序の、新道德の再建が出来ない事がわかつていながらも、それでも、破壊しなければいけなかったんだ、革命はまだ成らず、と孫^{そんぶん}文が言つて死んだそうだけれども、革命の完成というものは、永遠に出来ない事かも知れない、しかし、それでも革命を起さなければいけないんだ、革命の本質というものはそんな具合に、かなしくて、美しいものなんだ、そんな事をしたつて何になると言つたつて、そのかなしさと、美しさと、それから、愛、……」

フランスの国歌は、なおつづき、夫は話しながら泣いてしまつて、それから、てれくさそうに、無理にふふんと笑つて見せて、

「こりや、どうも、お父さんは泣き上^{じょう}戸らしいぞ。」

と言ひ、顔をそむけて立ち、お勝手へ行つて水で顔を洗ひながら、

「どうも、いかん。酔いすぎた。フランス革命で泣いちゃった。すこし寝るよ。」

とおつしやつて、六畳間へ行き、それつきりひつそりとなつてしまいましたが、身をもんで忍び泣いているに違いございません。

夫は、革命のために泣いたのではありません。いいえ、でも、フランスに於^おける革命は、家庭に於ける恋と、よく似ているのかも知れません。かなしくて美しいものの為に、フラ

ンスのロマンチックな王朝をも、また平和な家庭をも、破壊しなければならぬつらさ、その夫のつらさは、よくわかるけれども、しかし、私だって夫に恋をしているのだ、あの、昔の紙治かみじのおさんではないけれども、

女房のふところには

鬼すが棲むか

あああ

蛇じやが棲むか

とかいうような悲歎には、革命思想も破壊思想も、なんの縁えんもゆかりも無いような顔で素通りして、そうして女房ひとりを取り残され、いつまでも同じ場所で同じ姿でわびしい溜息ためいきばかりついていて、いったい、これはどうなる事なのでしょう、運を天にゆだね、ただ夫の恋の風の向きの変るのを祈って、忍従していなければならぬ事なのでしょう。子供が三人もあるのです。子供のためにも、いまさら夫と、わかる事もありませぬ。

二夜くらいつづけて外泊すると、さすがに夫も、一夜は自分のうちに寝ます。夕食がすんでから夫は、子供たちと縁側で遊び、子供たちにさえ卑屈なおあいそみたいな事を言い、ことし生れた一ばん下の女の子をへたな手つきで抱き上げて、

「ふとつていまチねえ、べっぴんちゃんでチねえ。」

とほめて、私がつい何の気なしに、

「可愛いでしょう？ 子供を見ると、ながいきしたいとお思いませんか？」

と言ったら、夫は急に妙な顔になって、

「うむ。」

と苦しそうな返事をなさったので、私は、はつとして、冷汗の出る思いでした。

うちで寝る時は、夫は、八時頃にもう、六畳間にご自分の蒲団とマサ子の蒲団を敷いて蚊帳を吊り、もすこしお父さまと遊んでいたらしいマサ子の服を無理にぬがせてお寝巻に着換えさせてやって寝かせ、ご自分もおやすみになって電燈を消し、それつきりなのです。

私は隣りの四畳半に長男と次女を寝かせ、それから十一時頃まで針仕事をして、それから蚊帳を吊って長男と次女の間に「川」の字ではなく「小」の字になってやすみます。

ねむられないのです。隣室の夫も、ねむられない様子で、溜息が聞え、私も思わず溜息をつき、また、あのおさんの、

女房のふところには

鬼が棲むか

あああ

蛇が棲むか

とかいう嘆きの歌が思い出され、夫が起きて私の部屋へやって来て、私はからだを固くしましたが、夫は、

「あの、睡眠剤が無かったかしら。」

「ございましたけど、あたし、ゆうべ飲んでしまいましたわ。ちつとも、ききませんでしたの。」

「飲みすぎるとかえってきかないんです。六錠くらいがちょうどいいんです。」
不機嫌ふきげんそうな声でした。

三

毎日、毎日、暑い日が続きました。私は、暑さと、それから心配のために、食べものが喉のどをとおらぬ思いで、頬ほおの骨が目立って来て、赤ん坊にあげるおっぱいの出もほそくなり、

夫も、食^{しょく}がちつともすすまぬ様子で、眼が落ちくぼんで、きらきらおそろしく光って、或^{ある}時、ふふんとご自分をあざけり笑うような笑い方をして、

「いつそ癡狂しちゃったら、気が楽だ。」

と言いました。

「あたしも、そうよ。」

「正しいひとは、苦しい筈^{はず}が無い。つくづく僕は感心する事があるんだ。どうして、君たちは、そんなにまじめで、まっとうなんだろうね。世の中を立派に生きとおすように生れついた人と、そうでない人と、はじめからはつきり区別がついているんじゃないかしら。」

「いいえ、鈍感なんですよ、あたしなんかは。ただ、……」

「ただ？」

夫は、本当に狂ったひとのような、へんな目つきで私の顔を見ました。私は口ごもり、ああ、言えない、具体的な事は、おそろしくて、何も言えない。

「ただね、あなたがお苦しうだと、あたしも苦しいの。」

「なんだ、つまらない。」

と、夫は、ほつとしたように微笑^{ほほえ}んでそう言いました。

その時、ふっと私は、ひさかたぶ久方振りで、すず涼しい幸福感を味わいました。（そうなんだ、夫の氣持を樂にしてあげたら、私の氣持も樂になるんだ。道德も何もありません、氣持が樂になれば、それでいいんだ。）

その夜おそく、私は夫の蚊帳かやにはいつて行つて、

「いいのよ、いいのよ。なんとも思つてやしないわよ。」

と言つて、倒れますと、夫はかすれた声で、

「エキスキウズ、ミイ。」

と冗談めかして言つて、起きて、床の上にあぐらをかき、

「ドンマイ、ドンマイ。」

夏の月が、その夜は満月でしたが、その月光が雨戸の破れ目から細い銀線になつて四、五本、蚊帳の中にさし込んで来て、夫の瘦やせたはだかの胸に當っていました。

「でも、お瘦せになりましたわ。」

私も、笑つて、冗談めかしてそう言つて、床の上に起き直りました。

「君だつて、瘦せたようだぜ。余計な心配をするから、そうなります。」

「いいえ、だからそう言つたじゃないの。なんとも思つてやしないわよ、つて。いいのよ、

あたしは利巧りこうなんですから。ただね、時々は、でえじにしてくんな。」

と言つて私が笑うと、夫も月光を浴びた白い歯を見せて笑いました。私の小さい頃に死んだ私の里の祖父母は、よく夫婦喧嘩げんかをして、そのたんびに、おばあさんが、でえじにしてくんな、とおじいさんに言い、私は子供心にもおかしくて、結婚してから夫にもその事を知らせて、二人で大笑いしたものでした。

私がその時それを言つたら、夫はやはり笑いましたが、しかし、すぐにまじめな顔になつて、

「大事にしているつもりなんだがね。風にも当てず、大事にしているつもりなんだ。君は、本当にいいひとなんだ。つまらない事を氣にかけず、ちゃんとプライドを持って、落ちついていなさいよ。僕はいつでも、君の事ばかり思っているんだ。その点に就ついては、君は、どんなに自信を持っていたても、持ちすぎるという事は無いんだ。」

といやにあらたまつたみたいなの、興きざめた事を言い出すので、私はひどく恰好かっこうが悪くなり、

「でも、あなた、お変りになつたわよ。」

と顔を伏せて小声で言いました。

（私は、あなたに、いつそ思われていないほうが、あなたにきらわれ、憎まれていたほうが、かえって気持ちがさっぱりしてたすかるのです。私の事をそれほど思ってたさきながら、他のひとを抱きしめているあなたの姿が、私を地獄につき落してしまふのです。

男のひとは、妻をいつも思っている事が道徳的だと感じがいているのではないでしようか。他にすきなひとが出来ても、おのれの妻を忘れないというのは、いい事だ、良心的だ、男はつねにそのようでなければならぬ、とても思い込んでゐるのではないでしようか。そうして、他のひとを愛しはじめると、妻の前で憂鬱ゆううつな溜息などついて見せて、道徳の煩悶はんもんとかをはじめて、おかげで妻のほうも、その夫の陰気くささに感染して、こつちも溜息、もし夫が平気で快活にしていたら、妻だって、地獄の思いをせずすむのです。ひとを愛するなら、妻を全く忘れて、あつさり無心に愛してやって下さい。」

夫は、力無い声で笑い、

「変わるもんか。変りやしないさ。ただもうこの頃は暑いんだ。暑くてかなわぬ。夏は、どうも、エキスキュウズ、ミイだ。」

とりつくしまも無いので、私も、少し笑い、

「にくいひと。」

と言つて、夫をぶつ真似まねをして、さつと蚊帳から出て、私の部屋の蚊帳にはいり、長男と次女のあいだに「小」の字の形になつて寝るのでした。

でも、私は、それだけでも夫に甘えて、話をして笑い合う事が出来たのがうれしく、胸のしこりも、少し溶けたような氣持で、その夜は、久しぶりに朝まで寝ぐるしい思いをせずにとろとろと眠れました。

これからは、何でもこの調子で、軽く夫に甘えて、冗談を言い、ごまかしだつて何だつてかまわない、正しい態度で無かつたつてかまわない、そんな、道徳なんてどうだつていい、ただ少しでも、しばらくでも、氣持の楽な生き方をしたい、一時間でも二時間でもたのしかつたらそれでいいのだ、という考えに變つて、夫をつねたりして、家の中に高い笑い声もしばしば起るようになった矢先、或る朝あだしぬけに夫は、温泉に行きたいと言ひ出しました。

「頭がいたくてね、暑氣しよきに負けたのだろう。信州のあの温泉、あのちかくには知つてる人もいるし、いつでもおいで、お米持参の心配はいらない、とその人が言っているんだ。二、三週間、静養して来たい。このままだと、僕は、氣が狂いそうだ。とにかく、東京から逃げたいんだ。」

そのひとから逃げたくなって、旅に出るのかしら、とふと私は考えました。

「お留守るすのあいだに、ピストル強盗がはいったら、どうしよう。」

と私は笑いながら、（ああ、悲しいひとたちは、よく笑う）そう言いますと、

「強盗に申し上げたらいいさ、あたしの亭主は氣違いですよ、って。ピストル強盗も、氣違いには、かなわないだろう。」

旅に反対する理由ありませんでしたので、私は夫のよそゆきの麻あさの夏服を押入おしいれから取り出そうとして、あちこち捜しましたが、見当りませんでした。

私は青白くなった氣持で、

「無いわ。どうしたのでしょうか。空巢あきすにはいられたのかしら。」

「売ったんだ。」

夫は泣きべそに似た笑い顔をつくつて、そう言いました。

私は、ぎよつとしましたが、しいて平氣よそおを装つて、

「まあ、素早い。」

「そこが、ピストル強盗よりも凄すごいところさ。」

その女のひとのために、内緒ないしょでお金の要る事があつたのに違いないと私は思いました。

「それじゃ、何を着ていらつしやるの？」

「開襟かいきんシャツ一枚でいいよ。」

朝に言い出し、お昼にはもう出発ということになりました。一刻も早く、家から出て行きたい様子でしたが、炎天つづきの東京にめずらしくその日、にわかあめ 俄雨があり、夫は、リュックを背負い靴をはいて、玄関の式台に腰をおろし、とてもいらいらしているように顔をしかめながら、雨のやむのを待ち、ふいと一言、

「さるすべりは、これは、一年置きに咲くものかしら。」
とつぶや呟きました。

玄関の前の百日紅さるすべりは、ことは花が咲きませんでした。

「そうなんでしょうね。」

私もぼんやり答えました。

それが、夫と交した最後の夫婦らしい親しい会話でございました。

雨がやんで、夫は逃げるようにそそくさと出かけ、それから三日後に、あの諏訪湖心中の記事が新聞に小さく出ました。

それから、諏訪の宿から出した夫の手紙も私は、受取りました。

「自分がこの女の人と死ぬのは、恋のためではない。自分は、ジャーナリストである。ジャーナリストは、人に革命やら破壊やらをそのかして置きながら、いつも自分はするりとそこから逃げて汗などを拭いている。実に奇怪な生き物である。現代の悪魔である。自分はその自己嫌悪に堪えかねて、みずから、革命家の十字架にのぼる決心をしたのである。ジャーナリストの醜聞^{しゅうぶん}。それはかつて例の無かった事ではあるまいか。自分の死が、現代の悪魔を少しでも赤面させ反省させる事に役立ったら、うれしい。」

などと、本当につまらない馬鹿げた事が、その手紙に書かれていました。男の人つて、死ぬる際^{きわ}まで、こんなにもつたい振つて意義だの何だのにこだわり、見栄^{みえ}を張つて嘘^{うそ}をついていなければならぬのかしら。

夫のお友達の方から伺^{うかが}ったところに依^よると、その女のひとは、夫の以前の勤め先の、神田の雑誌社の二十八歳の女記者で、私が青森に疎開していたあいだに、この家へ泊りに来たりしていたそうで、妊娠^{にんしん}とか何とか、まあ、たったそれくらいの事で、革命だの何だのと大騒ぎして、そうして、死ぬなんて、私は夫をつくづく、だめな人だと思いました。

革命は、ひとが楽に生きるために行うものです。悲壮な顔の革命家を、私は信用いたしません。夫はどうしてその女のひとを、もつと公然としたのしく愛して、妻の私までのし

くなるように愛してやる事が出来なかつたのでしよう。地獄の思いの恋などは、ご当人の苦しさも格別でしようが、だいいち、はためいわくです。

気の持ち方を、軽くくると変えるのが真の革命で、それさえ出来たら、何のむずかしい問題もない筈です。自分の妻に対する気持一つ変える事が出来ず、革命の十字架もすさまじいと、三人の子供を連れて、夫の死骸を引取りに諏訪へ行く汽車の中で、悲しみとか怒りとかいう思いよりも、呆れかえった馬鹿々々しさに身悶えあきしました。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月24日公開

2005年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おさん

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>